



Title	自己概念の場面依存性について
Author(s)	榎本, 博明
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2002, 28, p. 96-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7033
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自己概念の場面依存性について

榎 本 博 明

自己概念の場面依存性について

榎本 博明

問題と目的

自己および他者のパーソナリティの理解にあたっては、本人の自己概念を知るのが有効な方法のひとつと考えられる。北村(1977)は、「自己観というのは、自己概念とか自己像とかよばれることもあるが、本人が自分のありのままの、本当の姿と認めているもので、人格のその他の諸傾向の現われ方を規定し、人格の輪郭を形づくるものである。そこで人の個性的な独自の行動を理解しそれを予測するときには、本人の自己観を知る必要がある」としている。自己概念が人の行動・思考・感情などを規定していることは、さまざまな領域で実証されている。たとえば、Tice(1992)は、自己概念を変化させるとそれにともなって行動も自己概念の変化に合わせる方向の変化を示すことを明らかにし、Campbell & Fehr(1990)は、自分に対する他者の反応の認知が自己概念に沿った方向へと歪むことを明らかにしている。

自己概念の測定法には、20答法やSD法をはじめさまざまな方法があるが、いずれにおいても自己概念を比較的永続性のあるものとして一般化したかたちで問うことが多い。だが、自己概念は、ある程度安定性を保っているとはいえ、けっして固定的なものではなく、新たな経験により絶えず変化し続けるものでもある。たとえば、Neimeyer & Raeshide(1991)は、自分に当てはまらないと本人が思っている形容詞に関係した個人的な経験を敢えて想起させると、その形容詞を取り込むようなかたちの自己概念の変化が生じることを明らかにしている。だからといって、ある人物の自己概念が別の人物の自己概念と簡単に入れ代わられるほど支離滅裂なものではなく、自己概念はその同一性が保たれるかたちで静かに変化を経験していくのであり、かなり安定したものであると考えられる。

このように、自己概念が比較的永続性のあるものであるとしても、それは自己概念が単一不変のものであることを意味するわけではない。各種のパーソナリティ・テストを実施する際に、被験者から「明るいときもあるけど暗いときもある」「親切なつもりだけどすごく意地悪になることもある」のでどう答えたらよいのか迷ってしまう、のような評言を耳にすることがある。自己概念が場面によってかたちを変えるのは、経験的にみ

て自明のことのようと思われる。性格を研究する者が当たり前のよう実施する質問紙調査にあたって、少なからぬ被験者が経験する上述のような困惑は、自己概念が場面によって変動することが考慮されていないことによるところが大きいのではないか。したがって、自己概念の測定にあたっては、場面による変動にみられる規則性も含めたかたちで自己概念がある程度の持続性を保っているという前提に立つことが必要と考えられる。

人間の世間性について論じている和辻(1934)は、「人が自であり他であるのはすでに人の間の関係にもとづいて」おり「人間関係が限定せられることによって自が生じ他が生ずる」とし、人間関係の文脈においてはじめて人間というものをとらえることができることを指摘している。すなわち、自分というものも、相手というものも、両者の関係が限定されることによって、言い換えれば、一定の間柄が定まることによって、はじめて生じてくるのであって、両者が出会う以前からもともと存在しているわけではない。「間」とか「仲」とかいうものがあってはじめて「私」と「あなた」がそこから規定されてくるのである。

こうしてみると、自己とはもともと明確な形をもって存在するものではなく、他者との関わりという具体的場面において形をなしてくるものであるといえる。たとえば、思想的に共鳴し人生について深く語り合う仲にある親友Aの前で表れる自分、趣味の会で仲良くなって軽いよもやま話を交わす仲にある友人Bの前で表れる自分、親密な間柄にある恋人Cの前で表れる自分、これらはみな私的な親しい人間関係のなかで表れるものではあっても、これらの間にずれがないなどということは考えられない。このように異なった間柄においては、むしろ異なった自分が引き出されるのが一般的であろう。

そのことは一人称代名詞の使われ方にも表れている。日本語では、私・僕・俺などいくつもの一人称代名詞があり、それらが場面に応じて使い分けられている。つまり、話者を示す一人称代名詞さえも、具体的な相手が表れないと決まらないのである。まず相手の身分・肩書きを知り、自分のそれと引き合わせ、両者を位置づけることで、一つの場が形成される。そうしてからでないと、どのような自分のかたちをとったらよいのかわからない。相手との間につくられる場を無視して一定不変の自分を押し通そうとすることは人間関係の妨げとなる(というよりも、そもそもそのような場面を超えた一定不変の自己といったものは存在するのであろうか)。相手と自分の関係によって、相手(あなた、君、おまえなどの人称代名詞ばかりでなく、おとうさん、おねえさんなどの親族名称や課長、先生、お客さんなどの地位名称まで用いられる)および自分(私、僕、俺などの人称代名詞のほかにも、親族名称や地位名称も用いられる)の呼び方までもが異なってくる。

このような一人称代名詞の使われ方はとくに日本語の特徴であるようだ。この点に関して日本語と欧米語の比較をしている鈴木(1973)は、「インド・ヨーロッパ系言語に於ては、一人称代名詞は、同一のことばが何千年にわたって連綿と一貫して用い続けられ

て」おり、「一人称代名詞のことばとしての同一性は有史以来変っていない」としている。すなわち、欧米語では、人称代名詞の主要な機能は、話し手と聞き手の区別を明確にすることにあり、それ以外の情報はなにも与えない。相手や状況に関わりなく話し手としての絶対的自己規定が可能である。英語なら I、ドイツ語なら Ich、フランス語なら Je である。これらは両者の人間関係の性質を反映するような敏感さは持ち合わせない。これに対して、日本語では抽象的な自分などというものはなく、その場その場で規定される「私」、「僕」、「俺」などがあるだけである。つまり、まず先に関係のネットワークで構成された場があり、そこに相手を定位し、そのあとになってようやく自己規定が可能となるのである。対象の規定が自己の規定の先行条件であるから、対象依存の自己規定ということになる。具体的な相手が現れないかぎり、話し手の自己は言語的には未定の空白状態に置かれるわけである。

このように具体的場面があってはじめて自己を規定できるのが日本語の特徴であり、場面により自分のかたちが異なるのはすぐれて日本的な特徴であるということができるが、場面によって自己がかたちを変えするという性質は社会的存在としての人間に普遍的につきまとうもののように思われる。たとえば、James(1892)が、社会的自己とは関わりをもつ人たちから受ける認識であり、人は自分を知っている人の数だけ社会的自己をもつとか、同じ集団に属する人たちからは似たようなイメージをもたれているであろうから人は所属する集団の数だけ社会的自己をもつというとき、自己が場面によって異なったかたちをとることが想定されているのは明らかであろう。

このような社会的自己に関する最近の心理学的研究に目を転じると、Song & Hattie(1984)が、自己概念の階層モデルを検討する中で、仲間に関連した自己概念と家族に関連した自己概念に分離して解釈できることを実証している。

シャベルソン・モデル(Shavelson et al., 1976)においても、社会的自己概念は仲間に関連した自己概念と重要な他者に関連した自己概念という2つの下位概念をもつ。だが、自己概念は社会的相互作用の中で形成されるものであり、それにあたって決定的な意味をもつ重要な他者には、家族ばかりでなく仲間も含まれる。そこで、Byrne & Shavelson(1996)は、シャベルソン・モデルの社会的自己概念部分の改訂・拡張モデルを提示している。そこでは、児童期・青年期の主な活動領域が学校と家庭に分けられることに対応して、社会的自己概念は学校に関連した自己概念と家庭に関連した自己概念の2つの下位概念に分けられる。さらに、前者はクラスメートに関連した自己概念と先生に関連した自己概念に、後者はきょうだいに関連した自己概念と両親に関連した自己概念にそれぞれ分けられている。そして、このモデルの妥当性を支持する実証的なデータを示している。

Kihlstrom & Cantor(1984)は、文脈の中の自己(self-in-context)という観点から、一人でいるときの自己と他者と一緒にいるときの自己、知人と一緒にいるときの自己と見知らぬ人と一緒にいるときの自己、家族と一緒にいるときの自己と友達と一緒にいる

ときの自己と仕事仲間と一緒にいるときの自己、母親と一緒にいるときの自己と父親と一緒にいるときの自己と配偶者と一緒にいるときの自己、などといった階層構造をなす一連の自己があるのではないかとしている。

榎本(1987)は、自己開示の測定において、社会的自己を公的役割関係の側面と私的人間関係の側面に分け、さらにその後は私的人間関係の側面も同性関係と異性関係に分けてとらえている(榎本, 1997)。

Bruner(1994)は、概念としての自己のもつ性質として、対話している相手の関数として多様に変化するということをあげている。このような自己が関わりをもつ相手の関数として変化するということは、物語としての自己という観点から榎本(1998; 1999)が強調するところである。

以上のように考えてくると、個人の自己概念を把握しようとする際には、具体的な特定の場面における自己の性質および複数の場面間における自己の変化の法則性を理解することが求められるといえよう。一般に自己概念の測定においては、「あなたはどんな人ですか？」式に文脈を限定せずに問われることが多い。しかし、前述のように問われる側の立場に立ってみると、「明るい面もあれば暗い面もある」「素直なときもあれば意地っぱりなときもある」「大胆なところもあれば慎重なところもある」のように、多くの形容詞に対していずれとも決しがたいものであり、強引に引き出された場面を超越した回答は、本人のもつ実際の自己概念を十分に反映したものとはなり得ない。測定された個人の性格特性がその個人の現実場面における行動と相関しないとする Mischel(1968)などによる特性論批判を克服し、より有効な個人の性格特性の把握に至るひとつの可能性が、ここから開かれるのではないかと考えられる。

そこで、本論文では、そこに至る前段階として、複数の場면을規定することにより場面ごとに異なる自己概念が抽出されるのを確認すること、そして場面によって大きく変動する自己の側面もあればあまり変動しない自己の側面もあることを明らかにしたい。

方 法

材料 自己叙述用形容詞リスト：自己概念のなかでもとくにパーソナリティを直接描写する形容詞のリストを用いて、各被験者の自己概念の一端の測定を試みた。自己概念を表わすための形容詞、すなわち自己叙述のための形容詞を自己叙述詞と呼ぶことにする。本研究では、自己叙述詞のなかでもパーソナリティに関わるものに限定することにした。それは、身体的特徴や思想・趣味・抱負などパーソナリティ以外のものを表わす(パーソナリティを間接的に暗示するものであっても、直接パーソナリティを形容するものではないという意味において)自己叙述詞よりもパーソナリティを直接的に表わす自己叙述詞こそが場面により変動しやすいと考えたからである。そこで、20答法を用いた予備研究により抽出された多くの自己叙述詞のなかからパーソナリティを直接指し示すもの

を取り出し(実際パーソナリティを表わすものが9割以上を占める)使用頻度の高いものを選定し、さらに意味的に重複するものを削ることにより、自己叙述詞45個に絞った。

また、本研究においては、一口に自己概念といっても想定する自己の置かれた状況によりその中身は異なると考えるため、具体的状況を試しに3つ設定した。ここではとくに私的な間柄に絞り、「家族と一緒にのとき」「とくに仲の良い友だちと一緒にのとき」「好きな異性と一緒にのとき」の3場面を設定し、それぞれの場面における自分にどの程度当てはまるかを評定させるという方法をとった。評定は、「まったく当てはまらない」から「よく当てはまる」に至る5段階評定とした。

被験者 大学生 185名(男子:94名、女子:91名)

結果と考察

まずはじめに、個人を捨象して場面のみに焦点を絞り、各場面における自己概念の平均像とその場面間変動に関する検討を行う。そのあとで、個人内における自己概念の場面間変動をもとに、各自己叙述詞の場面間変動性について検討したい。

1. 各場面に特徴的な自己叙述詞

各形容詞が自分にどの程度当てはまるかを答えさせたところ、その回答は想定された場面によって異なり、「家族と一緒にのとき」「とくに仲の良い友だちと一緒にのとき」「好きな異性と一緒にのとき」という3場面それぞれに特徴的な傾向がみられた。以下、「家族と一緒にのとき」を家族場面、「とくに仲の良い友だちと一緒にのとき」を友人場面、「好きな異性と一緒にのとき」を異性場面とする。

家族場面についてみると、その場面における典型的な自己概念を特徴づける形容詞として、当てはまる程度の高い順に「めんどくさがり」「はっきりものを言う」「明るい」「いいかげん」「おしゃべり」「がんこ」「短気」「楽観的」「わがまま」「負けず嫌い」などが目立っていた。反対に、自己概念に組み込まれにくい形容詞として、当てはまる程度の低い順に「内気」「ぎこちない」「嫌といえない」「おとなしい」「照れ屋」「気が小さい」「繊細」「くよくよする」「情熱的」「目だちたがり」などがみられた。ここから、家族場面においては、多くの者は無理をせずに嫌なことは嫌と言い、内気にならず何でも思ったとおりをはっきりと言い、小さなことを気にしたり気をつかったりせずに気楽に過ごし、ときに短気でわがままになるくらいに感情や欲求を素直に表出し、頑固に自己主張していることがわかる。

友人場面についてみると、その場面における典型的な自己概念を特徴づける形容詞として、当てはまる程度の高い順に「明るい」「おおらか」「おしゃべり」「親切」「楽観的」「おもしろい」「はっきりものを言う」「素直」「やさしい」「我慢強い」などが目立っていた。反対に、自己概念に組み込まれにくい形容詞は、当てはまる程度の低い順に「ぎ

Table 1 自己叙述詞の場面ごとの平均・標準偏差と
場面による平均値の差の検定結果

	家族場面		友人場面		異性場面		場面間の差の検定		
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	家族/友人	家族/異性	友人/異性
情緒的	2.44	1.27	3.31	1.23	3.39	1.18	***	***	
明るい	3.88	1.10	4.26	0.80	3.91	1.01	***		***
我慢強い	2.83	1.23	3.50	1.01	3.61	1.04	***	***	
神経質	2.97	1.32	2.84	1.19	3.16	1.22			***
親切	2.98	0.99	3.74	0.77	3.91	0.89	***	***	*
いいかげん	3.74	1.10	3.01	1.13	2.55	1.16	***	***	***
素直	3.06	1.13	3.53	0.96	3.65	1.07	***	***	
嫌と言えない	2.24	1.23	3.43	1.23	3.48	1.21	***	***	
積極的	2.98	1.11	3.38	1.04	3.20	1.14	***	*	*
くよくよする	2.41	1.23	2.38	1.10	2.65	1.26		*	**
意欲的	2.82	1.09	3.30	1.03	3.27	1.11	***	***	
内気	2.01	1.07	2.23	1.01	2.65	1.19	**	***	***
せっかち	2.84	1.30	2.61	1.11	2.59	1.13	**	*	
繊細	2.35	1.15	2.57	1.14	2.99	1.21	**	***	***
大胆	3.24	1.17	3.23	1.11	2.91	1.13		***	***
おおらか	3.38	1.16	3.88	0.97	3.82	0.92	***	***	
行動力がある	2.99	1.17	3.32	1.10	3.16	1.12	***		
短気	3.59	1.25	2.53	1.18	2.38	1.09	***	***	
おしゃべり	3.70	1.11	3.83	0.96	3.36	1.13		***	***
落ち着きがない	3.05	1.25	2.97	1.21	3.05	1.17			
お調子者	3.17	1.36	3.30	1.24	2.90	1.21		**	***
寂しがりや	2.62	1.32	2.84	1.25	2.99	1.29	*	***	
強がり	3.33	1.26	2.99	1.18	3.19	1.19	**		*
でしゃばり	2.61	1.17	2.54	1.10	2.34	1.06		**	**
おとなしい	2.24	1.14	2.43	1.11	2.86	1.15		***	***
照れ屋	2.26	1.14	2.82	1.11	3.51	1.19	***	***	***
おもしろい	3.37	1.10	3.64	1.01	3.37	1.02	***		***
しっかり者	2.91	1.09	3.09	0.98	3.14	1.07	*	**	
がんこ	3.64	1.19	2.88	1.16	2.74	1.15	***	***	*
感情的	3.45	1.27	3.16	1.14	3.34	1.18	**		*
社交的	2.92	1.19	3.36	1.06	3.12	1.14	***	*	***
気が小さい	2.34	1.18	2.58	1.14	2.91	1.20	**	***	***
はっきりものを言う	3.94	1.04	3.57	1.13	3.28	1.16	***	***	***
ぎこちない	2.06	1.21	2.15	1.06	2.95	1.33		***	***
ひがみっぽい	2.71	1.36	2.37	1.13	2.53	1.19	**		
優柔不断	3.33	1.29	3.28	1.24	3.28	1.25			
負けず嫌い	3.52	1.21	3.28	1.15	3.01	1.28	**	***	**
まじめ	2.95	1.04	3.18	1.07	3.28	1.21	**	***	
楽観的	3.59	1.12	3.74	1.06	3.42	1.13		*	***
礼儀正しい	2.84	1.07	3.16	1.05	3.37	1.11	***	***	**
目だちたがり	2.49	1.11	2.65	1.24	2.51	1.16			
面倒みが良い	2.81	1.16	3.07	1.13	3.25	1.15	**	***	**
めんどくさがり	3.97	1.01	3.35	1.15	2.92	1.14	***	***	***
わがまま	3.59	1.14	2.82	1.14	2.85	1.23	***	***	
やさしい	3.30	0.90	3.51	0.84	3.79	1.01	***	***	***

* p .05 ** p .01 *** p .001

こちない」「内気」「ひがみっばい」「くよくよする」「おとなしい」「短気」「でしゃばり」「繊細」「気が小さい」「せっかち」のようになっていた。ここから、友人場面においては、多くの者は明るくおおらかで、小さなことを気にしたり内気になったりせず、親切でやさしく、おしゃべりではっきりものを言い、おもしろいことを言ったり素直に感情を表現したりするが、短気にならずでしゃばらずせっかちにならず忍耐強さを心がけるといように、けっこう気もつかっていることがわかる。

異性場面についてみると、その場面における典型的な自己概念を特徴づける形容詞として、当てはまる程度の高い順に「明るい」「親切」「おおらか」「やさしい」「素直」「我慢強い」「照れ屋」「嫌と言えない」「楽観的」「情熱的」などが目立っていた。反対に、自己概念に組み込まれにくい形容詞は、当てはまる程度の低い順に「でしゃばり」「短気」「目だちたがり」「ひがみっばい」「いいかげん」「せっかち」「くよくよする」「内気」「がんこ」のようになっていた。ここから、異性場面においては、多くの者は情熱的で親切でやさしくきちんとしており、明るくおおらかだが照れ屋で、でしゃばらず頑固にならずせっかちにならず気長で我慢強く嫌と言えないというように非常に気をつかっていることがわかる。

2. 自己概念の平均像の場面による違い

各形容詞に関して、2つの場面における得点の対比的検討を行うために、2つの場面ごとに平均値の差の検定(t検定)を行い、有意差のみられた形容詞に着目することにより、つぎのようなことがわかった。

家族場面と友人場面の比較によると、後者より前者において強くみられるものとして「いいかげん」「せっかち」「短気」「強がり」「がんこ」「感情的」「はっきりものを言う」「ひがみっばい」「負けず嫌い」「めんどくさがり」「わがまま」があり、前者より後者において強くみられるものに「情熱的」「明るい」「我慢強い」「親切」「素直」「嫌と言えない」「積極的」「意欲的」「内気」「繊細」「おおらか」「行動力がある」「寂しがりや」「照れ屋」「おもしろい」「しっかり者」「社交的」「気が小さい」「まじめ」「礼儀正しい」「面倒みが良い」「やさしい」がある。前節の各場面を特徴づける自己叙述詞の分析からも予測されることであるが、家族場面においては友人場面におけるよりも、自己と他者との良好な関係を築き維持するうえで好ましくないゆえに日頃抑圧しがちな性質も表面化しやすい。これは、家族との間にはすでに親密な関係が容易には揺るがない確固たるものとして築かれており、良好な関係の維持・発展をほとんど意識しなくても良い場であることを示すものと考えられる。その逆に、自己と他者との良好な関係を取り持つような社会的に好ましい性質が家族場面より友人場面において強く表面に出てくるようである。また、「内気」「寂しがりや」「照れ屋」「気が小さい」のように繊細さを感じさせる面が家族場面より友人場面において強く表れるのも特徴的であった。

家族場面と異性場면을較べてみると、後者より前者において強くみられるものとして、

Table 2 自己叙述詞の場面間変動性

	家族 友人	家族 異性	友人 異性	家族 友人 + 家族 異性 + 友人 異性
情緒的	1 .16	1 .31	0 .79	3 .26
明るい	0 .70	0 .75	0 .57	2 .02
我慢強い	1 .19	1 .41	0 .76	3 .36
神経質	0 .93	1 .03	0 .78	2 .74
親切	0 .94	1 .16	0 .63	2 .72
いいかげん	0 .99	1 .38	0 .85	3 .22
素直	0 .97	1 .09	0 .70	2 .76
嫌と言えない	1 .53	1 .65	0 .74	3 .91
積極的	1 .01	1 .09	0 .84	2 .94
くよくよする	0 .85	1 .04	0 .69	2 .58
意欲的	1 .01	1 .15	0 .77	2 .92
内気	0 .86	1 .19	0 .96	3 .01
せっかち	0 .82	1 .06	0 .65	2 .53
繊細	0 .78	1 .05	0 .80	2 .63
大胆	0 .80	1 .00	0 .81	2 .61
おおらか	0 .83	0 .98	0 .62	2 .42
行動力がある	0 .90	0 .97	0 .86	2 .74
短気	1 .31	1 .48	0 .72	3 .50
おしゃべり	0 .83	0 .97	0 .84	2 .65
落ち着きがない	0 .75	0 .91	0 .83	2 .49
お調子者	0 .83	1 .08	0 .78	2 .69
寂しがりや	0 .86	1 .03	0 .68	2 .57
強がり	1 .05	1 .03	0 .83	2 .91
でしゃばり	0 .84	0 .95	0 .75	2 .54
おとなしい	0 .84	1 .09	0 .94	2 .86
照れ屋	1 .07	1 .50	1 .02	3 .59
おもしろい	0 .69	0 .82	0 .59	2 .10
しっかり者	0 .71	0 .71	0 .56	1 .99
がんこ	1 .05	1 .14	0 .64	2 .83
感情的	0 .98	1 .04	0 .73	2 .75
社交的	0 .77	0 .78	0 .54	2 .09
気が小さい	0 .83	1 .11	0 .71	2 .65
はっきりものを言う	1 .00	1 .12	0 .74	2 .86
ぎこちない	0 .93	1 .44	1 .13	3 .50
ひがみっぽい	1 .06	1 .16	0 .85	3 .07
優柔不断	0 .74	0 .78	0 .57	2 .10
負けず嫌い	0 .70	0 .92	0 .74	2 .36
まじめ	0 .64	0 .80	0 .67	2 .11
楽観的	0 .62	0 .82	0 .62	2 .05
礼儀正しい	0 .84	0 .98	0 .65	2 .48
目だちたがり	0 .92	0 .98	0 .66	2 .56
面倒みが良い	0 .76	0 .95	0 .57	2 .28
めんどくさがり	0 .76	1 .17	0 .76	2 .68
わがまま	0 .97	1 .01	0 .76	2 .74
やさしい	0 .57	0 .86	0 .59	2 .02

「いいかげん」「せっかち」「大胆」「短気」「おしゃべり」「お調子者」「でしゃばり」「がんこ」「はっきりものを言う」「負けず嫌い」「楽観的」「めんどくさがり」「わがまま」があり、前者より後者において強くみられるものとして、「情熱的」「我慢強い」「親切」「素直」「嫌と言えない」「積極的」「くよくよする」「意欲的」「内気」「繊細」「おおらか」「寂しがりや」「おとなしい」「照れ屋」「しっかり者」「社交的」「気が小さい」「ぎこちない」「まじめ」「礼儀正しい」「面倒みが良い」「やさしい」がある。すなわち、家族場面と友人場面の比較の場合と同様に、家族場面においては異性場面におけるよりも、自己と他者との良好な関係を築き維持するうえで好ましくないゆえに日頃抑圧しがちな性質も表面化しやすいことがわかる。それに対して、自己と他者との良好な関係を取り持つような社会的に好ましい性質が家族場面より異性場面において強く表面に出てきやすいというのも、家族場面と友人場面の比較の場合と同様であった。さらに、異性場面においては家族場面におけるより繊細さを感じさせる性質が出てきやすいというのも家族場面と友人場面の比較の場合と同様であった。このように、家族場面との比較においては、友人場面に特徴的な自己概念と異性場面に特徴的な自己概念は非常に類似しているといえる。

ただし、友人場面と異性場面における自己概念の特徴が似ているというのは、あくまでも家族場面との比較のうえでのことであって、友人場面と異性場面を直接比較すれば、これらがそれぞれの場における自己概念の生成にかなり異なる規定力を持つことがわかる。たとえば、後者より前者に強くみられるものとして、「明るい」「いいかげん」「積極的」「大胆」「おしゃべり」「お調子者」「でしゃばり」「おもしろい」「がんこ」「社交的」「はっきりものを言う」「負けず嫌い」「楽観的」「めんどくさがり」がある。反対に、前者より後者に強くみられるものとして、「神経質」「親切」「くよくよする」「内気」「繊細」「強がり」「おとなしい」「照れ屋」「感情的」「気が小さい」「ぎこちない」「礼儀正しい」「面倒みが良い」「やさしい」がある。すなわち、家族場面との比較においては社会的に好ましい性質ばかりが前面に出て、好ましくない性質は抑制されがちであった友人場面であるが、異性場面との比較となると、「明るい」「積極的」「おもしろい」「社交的」のように社会的に好ましい性質と同時に「いいかげん」「でしゃばり」「がんこ」「めんどくさがり」のような好ましくない性質も表面に出やすいことがわかる。そして、「親切」「面倒みが良い」「やさしい」のような対人関係上とくに好ましい性質は異性場面においてより強く表れやすい。さらに、異性場面において「神経質」「くよくよする」「繊細」「照れ屋」「感情的」「気が小さい」「ぎこちない」が目立つように、異性場面では友人場面におけるよりも繊細で不安定な面が生じやすいことがわかる。

3. 個人の自己概念における自己叙述詞の場面間変動

各自己叙述詞に関して、個人個人の中での場面による評定値の差を被験者全員について検討することで、個人の自己概念の形成にあたって場面間変動の大きい自己叙述詞・

Table 3 自己叙述詞の場面間相関

家族場面 * 友人場面		家族場面 * 異性場面		友人場面 * 異性場面	
0.50以上	0.20以下	0.40以上	0.20以下	0.60以上	0.35以下
優柔不断	意欲的	優柔不断	我慢強い	優柔不断	内気
めんどくさがり	はつきりを言う	まじめ	ぎこちない	面倒みが良い	親切
落ち着きがない	我慢強い	しっかり者	内気	社交的	おとなしい
社交的	嫌と言えない	わがまま	意欲的	寂しがりや	我慢強い
負けず嫌い		社交的	嫌と言えない	がんこ	ぎこちない
まじめ		負けず嫌い	親切	楽観的	
お調子者		楽観的	はつきりを言う	嫌と言えない	
面倒みが良い		めんどくさがり	積極的		
せっかち		明るい			
楽観的					
やさしい					

小さい自己叙述詞がわかる。

そこで、各自己叙述詞に関して、ひとりひとりの場面間の評定値のずれ（各個人の2つの場面間の評定値の差の絶対値）を被験者全員分合計するという方法をとった。その合計値の大きいものは一般に場面間変動の大きい自己叙述詞、小さいものは一般に場面間変動の小さい自己叙述詞といえる。

家族場面と友人場面の評定値の個人内のずれの合計が大きい自己叙述詞を大きい順にあげると、「嫌と言えない」「短気」「我慢強い」「情熱的」「照れ屋」「ひがみっばい」「強がり」「がんこ」「目だちたがり」「積極的」「意欲的」のようになり、これらに関する自己評定はこの2つの場面間でかなり異なってくるといえる。ずれの小さい自己叙述詞を小さい順にあげると、「やさしい」「楽観的」「まじめ」「おもしろい」「明るい」「負けず嫌い」「しっかり者」「優柔不断」「落ち着きがない」「面倒みが良い」「めんどくさがり」「社交的」のようになり、これらに関する自己評定はこの2つの場面間ではあまり変動がみられないことがわかる。家族場面・友人場面間の相関係数をみても、0.50以上のものに「優柔不断(0.61)」「めんどくさがり(0.59)」「落ち着きがない(0.56)」「社交的(0.56)」「負けず嫌い(0.56)」「まじめ(0.54)」「お調子者(0.52)」「面倒みが良い(0.51)」「せっかち(0.50)」「楽観的(0.50)」「やさしい(0.50)」があり、これらは2つの場面間でずれの小さい自己叙述詞といえる。反対に、「意欲的(0.17)」「はつきりものを言う(0.19)」「我慢強い(0.20)」「嫌と言えない(0.20)」などの相関係数は0.20以下であり、これらは一方で当てはまってももう一方で当てはまるかどうかかわからないもの、つまり2つの場面間でずれの大きい自己叙述詞といえる。

家族場面と異性場面の評定値の個人内のずれの合計が大きい自己叙述詞を大きい順にあげると、「嫌と言えない」「照れ屋」「短気」「ぎこちない」「我慢強い」「いいかげん」「情熱的」「内気」「めんどくさがり」「親切」「ひがみっばい」のようになり、これらに

関する自己評定はこの2つの場面間でかなり異なってくるといえる。反対に、ずれの小さい自己叙述詞を小さい順にあげると、「しっかり者」「明るい」「社交的」「優柔不断」「まじめ」「おもしろい」「楽観的」「やさしい」「落ち着きがない」「負けず嫌い」となり、これらに関する自己評定はこの2つの場面間ではあまり異ならないことがわかる。家族場面・異性場面間の相関係数をみても、「優柔不断(0.57)」「まじめ(0.51)」「しっかり者(0.50)」「わがまま(0.50)」では0.50以上、「社交的(0.48)」「負けず嫌い(0.47)」「楽観的(0.41)」「めんどくさがり(0.41)」「明るい(0.40)」では0.40以上となっており、これらは2つの場面間でずれの小さい自己叙述詞といえる。反対に、「我慢強い(-0.01)」「ぎこちない(0.04)」「内気(0.09)」の相関係数はマイナス相関も含めて0.10以下で2つの場面間でまったく無関係、「意欲的(0.13)」「嫌と言えない(0.16)」「親切(0.15)」「はっきりものを言う(0.19)」「積極的(0.20)」では0.20以下と2つの場面間でほとんど関係がない、つまりずれが大きいといえる。

友人場面と異性場面の評定値の個人内のずれの合計の大きい自己叙述詞を大きい順にあげると、「ぎこちない」「照れ屋」「内気」「おとなしい」「行動力がある」「いいかげん」「ひがみっぽい」「積極的」「おしゃべり」「落ち着きがない」「強がり」となり、これらに関する自己評定はこの2つの場面間でかなり異なってくるといえる。反対に、ずれの小さい自己叙述詞を小さい順にあげると、「社交的」「しっかり者」「明るい」「優柔不断」「面倒みが良い」「おもしろい」「やさしい」「おおらか」「楽観的」「親切」のようになり、これらに関する自己評定はこの2つの場面間ではあまり異ならないことがわかる。友人場面・異性場面間の相関係数をみても、「優柔不断(0.73)」では0.70以上、「面倒みが良い(0.64)」「社交的(0.63)」「寂しがりや(0.63)」「がんこ(0.62)」「楽観的(0.62)」「嫌と言えない(0.60)」では0.60以上となっており、これらは2つの場面間でずれの小さい自己叙述詞といえる。相関係数が0.20以下のものはなく、「内気(0.26)」が0.20台、「親切(0.31)」「おとなしい(0.32)」「我慢強い(0.34)」「ぎこちない(0.35)」が0.30台の前半で、これらは2つの場面間の関連が比較的弱くずれの大きい自己叙述詞といえる。

以上は2つの場面ごとの比較であったが、つぎに3つの場面を通しての場面間変動を算出した(Table 2:各自己叙述詞ごとに、各人の家族・友人場面間、家族・異性場面間、友人・異性場面間の評定値のずれを合計し、それを被験者全員分足したもの)。その結果、場面間変動の大きい自己叙述詞として、大きい順に「嫌と言えない」「照れ屋」「短気」「ぎこちない」「我慢強い」「情熱的」「いいかげん」「ひがみっぽい」「内気」「積極的」などがあり、場面間変動の小さい自己叙述詞としては、小さい順に「しっかり者」「明るい」「やさしい」「楽観的」「社交的」「優柔不断」「まじめ」「めんどくさがり」「負けず嫌い」「おおらか」などがあることがわかった。

このような結果から、人柄に関する形容詞、すなわち自己概念の測定にあたって用いられる自己叙述詞には、場面による変動性の大きいものと小さいもの、すなわち場面依

存性の強いものと弱いものがあることがわかる。このことは、場面間変動性の大きい自己の側面と小さい自己の側面があることを意味するものである。

こうしてみると、たとえば「社交的」のように場面間変動を概念そのものの内を含む形容詞や「しっかり者」「明るい」「やさしい」「楽観的」「優柔不断」のように場面依存性のとくに弱い形容詞は別としても、場面依存性の強い形容詞を用いて自己概念を一般化した形で（場面を限定しないという意味において）問うのは無意味であり、そのようにして抽出された自己概念は現実の場における個性を十分に反映していないといってい

4．因子からみた各場面が要求する性格特性

つぎに、場面による自己概念の変動をより明確化するために、自己叙述詞を因子ごとにくくって検討することにした。

各場面ごとに主成分分析を行った結果、固有値 1 以上のものとして、家族場面で12因子、友人場面で11因子、異性場面で12因子が抽出された。

想定された場面により因子構造に多少の違いはみられたが、同じ因子を構成する形容詞をグループ化していくと非常に似た構成となる。そこで、「家族と一緒にいるとき」の因子構造を基準にして各因子の合成得点を算出することとした。各場面の因子数や因子負荷量を参考に、11因子までとし、第 1 因子から第 7 因子は因子負荷量の上位 3 項目の合計得点を、第 8 因子から第 11 因子は上位 2 項目の合計得点をそれぞれの因子得点とした。その結果、各因子得点はつぎのような項目から構成されることとなった。

第 1 因子：意欲的、行動力がある、積極的の 3 項目からなり、「積極性の因子」と命名した。

第 2 因子：お調子者、おしゃべり、明るい の 3 項目からなり、「明るさの因子」と命名した。

第 3 因子：内気、気が小さい、ぎこちない の 3 項目からなり、「内気とぎこちなさの因子」と命名した。

第 4 因子：やさしい、面倒みが良い、親切の 3 項目からなり、「やさしさの因子」と命名した。

第 5 因子：神経質、繊細、くよくよする の 3 項目からなり、「繊細さの因子」と命名した。

第 6 因子：感情的、がんこ、ひがみっぽい の 3 項目からなり、「強情さの因子」と命名した。

第 7 因子：めんどくさがり、いいかげん、短気の 3 項目からなり、「怠慢と気短の因子」と命名した。

第 8 因子：負けず嫌い と 目だちたがり からなり、「自己顕示性の因子」と命名した。

第 9 因子：強がり と 素直（反転項目） からなり、「勝ち気の因子」と命名した。

Table 4 各場面における自己概念因子得点

		家族と一緒に とくに仲の良い 好きな異性 友だちと一緒に と一緒 (異性場面)			平均値の差の検定の結果		
		(家族場面)	(友人場面)	(異性場面)	家族/ 友人場面	家族/ 異性場面	友人/ 異性場面
第1因子	積極性	8.78 (2.75)	10.01 (2.74)	9.63 (2.82)	***	***	
第2因子	明るさ	10.75 (2.94)	11.39 (2.41)	10.17 (2.64)	***	**	***
第3因子	内気とぎこちなさ	6.41 (2.67)	6.97 (2.49)	8.50 (2.82)	**	***	***
第4因子	やさしさ	9.09 (2.44)	10.32 (2.18)	10.96 (2.47)	***	***	***
第5因子	繊細さ	7.72 (2.90)	7.79 (2.52)	8.81 (2.61)		***	***
第6因子	強情さ	9.81 (2.92)	8.41 (2.43)	8.60 (2.52)	***	***	
第7因子	怠慢と気短	11.30 (2.49)	8.89 (2.52)	7.85 (2.55)	***	***	***
第8因子	自己顕示性	6.02 (1.89)	5.94 (1.89)	5.52 (1.86)		***	***
第9因子	勝ち気	6.27 (1.87)	5.46 (1.61)	5.54 (1.58)	***	***	
第10因子	もろさ	5.79 (1.98)	5.34 (1.65)	5.38 (1.58)	**	**	
第11因子	おおらかさ	6.97 (1.85)	7.62 (1.57)	7.23 (1.54)	***		***

() の中は標準偏差

* p .05

** p .01

*** p .001

第10因子：寂しがりやと我慢強い（反転項目）からなり、「もろさの因子」と命名した。
 第11因子：楽観的とおおらかからなり、「おおらかさの因子」と命名した。

ここでは、以上のように選定された項目の得点を各因子ごとに加算した合成得点を、それぞれの因子の因子得点とする。まずはじめに、各場面における自己概念の特徴を因子得点をもとにみていくことにする。

家族場面についてみると、「怠慢と気短の因子」の得点が最も高く、「明るさの因子」と「おおらかさの因子」の得点もかなり高く、この3つが目だっている。反対に、「内気とぎこちなさの因子」の得点が他と比べて著しく低く、「繊細さの因子」の得点も低めである。これにより家族場面においては、細かなことを気かけたりせず堂々としており、そうした抑制のない自然体による明るくおおらかな面と怠慢で気短な面という一見すると相反するかたちを同時にとる自己の姿が浮かび上がってくる。

友人場面についてみると、「おおらかさの因子」と「明るさの因子」の2つの得点が群を抜いて高く、「やさしさの因子」「積極性の因子」の得点も他と比べてかなり高い。反対に、「内気とぎこちなさの因子」の得点の低さが目だっている。これにより、友人

場面においては、細かなことを気にかけたりせずに堂々としており、そこからくる明るさやおおらかさが積極性ややさしさにもつながっているという自己の姿が浮かび上がってくる。

異性場面についてみると、「おおらかさの因子」の得点が最も高く、「やさしさの因子」がそれに続いている。さらに、「明るさの因子」や「積極性の因子」の得点も高くなっている。とりわけ得点の低いものはなく、「怠慢と気短の因子」がやや低めといった程度である。ここから、異性場面においては、おおらかでやさしく、いいかげんにしたりめんどくさがったりせずにまめであり、短気にならず明るいといった自己の姿が浮かび上がってくる。

さらに、家族場面と友人場面、家族場面と異性場面、友人場面と異性場面のよう、2つの場面間の各因子得点を対比的に検討するために、2つの場面ごとに組合せて平均値の差の検定(t検定)を行った結果、いずれの場面間においても大半の因子得点において有意差があることが明かとなった(Table 4 参照)。すなわち、家族・友人場面間では「繊細さの因子」と「自己顕示性の因子」を除くすべての因子で、家族・異性場面間では「おおらかさの因子」を除くすべての因子で、友人・異性場面間では「積極性の因子」「強情さの因子」「勝ち気の因子」「もろさの因子」以外の因子で、それぞれ有意な差がみられた。

家族・友人場面間でとび抜けて差の大きいのが「怠慢と気短の因子」であり、友人場面と較べて家族場面できわめて強く表面化しやすい性質であることがわかる。さらに、「強情さの因子」や「勝ち気の因子」も両場面間で比較的大きな差があり、これらの因子が友人場面と較べて家族場面でかなり強く表面化しやすい面を表していることがわかる。「積極性の因子」「やさしさの因子」「おおらかさの因子」でも両場面間で比較的大きな差がみられるが、これらの因子は逆に家族場面より友人場面においてより強く出やすい面を表していることがわかる。そして、「繊細さの因子」と「自己顕示性の因子」では両場面であまり差がないといえる。

家族・異性場面間で差がきわめて大きいのが「怠慢と気短の因子」で、このような面が異性場面と比べて家族場面でとくに強く出やすいものであることがわかる。それほど極端な差ではないが、「強情さの因子」と「勝ち気の因子」でも両場面間で差がみられ、これらの因子は異性場面と較べて家族場面で強く出やすい面を表しているといえる。逆に、異性場面における得点が家族場面におけるそれを大きく上回っているのが「内気とぎこちなさの因子」であり、これは異性場面における自己のかたちを特徴づける面のひとつであるといつてよいであろう。また、「やさしさの因子」と「繊細さの因子」でも両場面間の差が比較的大きく、これらの因子は家族場面よりも異性場面において強く出やすい面を表していることがわかる。

友人・異性場面間でそれほど極端な差のあるものはみられないが、「内気とぎこちなさの因子」の得点が異性場面で友人場면을大きく上回っており、この因子が異性場面で

表面化しやすい自己の面を表しているといえる。「繊細さの因子」でも両場面間で差があり、これは異性場面で表面化しやすい面を表しているといえる。逆に、「明るさの因子」と「怠慢と気短の因子」の得点は異性場面より友人場面において高くなっており、これらの因子は友人場面でより表面化しやすい面を表しているといつてよいであろう。

5. 各因子得点の個人内における場面間変動

以上の場面間比較において材料となったのは、各場面における各因子の平均得点であった。つまり、各場面における被験者全員の合算による平均像の比較であった。そこでは、当然のことながら個々の被験者の項目得点あるいは因子得点の場面間変動が相殺しあうことになる。したがって、ここでは各因子を構成する項目の個人得点に立ち返り、それらが場面によりどのように変動するかに着目することにする。具体的には、各項目ごとに、個人得点の場面間差を算出し（いずれの場面で得点が高いかは問わずに純粋に差を問題とするため、差は絶対値で表す）その被験者全員分の平均を各項目の場面間変動得点とする。因子ごとにそれぞれの因子を構成する項目の場面間変動得点の和を求め、それを項目数で割ると、それが各因子の場面間変動性の指標となる（Table 5）。

Table 5 をみると、家族場面と友人場面の2つの場面間における変動性の大きいのは、「強情さの因子」「怠慢と気短の因子」「積極性の因子」である。やや大きめなのは「内気とぎこちなさの因子」と「繊細さの因子」である。ここから、強情さ、怠慢や気短、積極性、内気とぎこちなさ、繊細さといった面は、同一個人をみても家族・友人場面間で変動しやすいことがわかる。反対に、2つの場面間で変動性の小さいのは「おおらかさの因子」と「自己顕示性の因子」である。すなわち、おおらかさ、自己顕示性といった面は、同一個人のなかでは家族・友人場面間であまり変動せず、比較的安定した面であることがわかる。

家族場面と異性場面の2つの場面間における各因子の変動性についてみると、大きいのは「怠慢と気短の因子」「内気とぎこちなさの因子」「強情さの因子」「積極性の因子」「繊細さの因子」「やさしさの因子」などである。つまり、怠慢と気短、内気とぎこちなさ、強情さ、積極性、繊細さ、やさしさといった面は、同一個人のなかでも家族場面と異性場面の間では変動しやすいといえる。とくに、怠慢と気短、内気とぎこちなさといった面は、同一個人においても2つの場面間でかなり異なった現れかたをするといえる。反対に、2つの場面間で変動性の小さいのは、「おおらかさの因子」と「自己顕示性の因子」である。すなわち、おおらかさ、自己顕示性といった面は、家族・異性場面間であまり変動せず、同一個人のなかでは比較的安定した面であることがわかる。

友人場面と異性場面の2つの場面間における各因子の変動性についてみると、唯一「内気とぎこちなさの因子」が大きい。つまり、内気とぎこちなさといった面は、友人場面と異性場面の間では同一個人といつてもかなり異なった現れを示す面であるといえる。反対に、「おおらかさの因子」「自己顕示性の因子」「もろさの因子」「勝ち気の因子」「や

Table 5 各因子の個人内における場面間変動性：各場面間の評定値の差

		家族・友人間 M (SD)	家族・異性間 M (SD)	友人・異性間 M (SD)	3 場面間 M
第 1 因子	積極性	2.92 (2.20)	3.21 (2.01)	2.47 (1.98)	8.60
第 2 因子	明るさ	2.36 (1.89)	2.81 (2.01)	2.20 (1.91)	7.37
第 3 因子	内気とぎこちなさ	2.62 (2.07)	3.74 (2.74)	2.80 (2.08)	9.16
第 4 因子	やさしさ	2.26 (1.68)	2.97 (2.05)	1.79 (1.60)	7.02
第 5 因子	繊細さ	2.56 (1.93)	3.11 (2.23)	2.27 (1.95)	7.94
第 6 因子	強情さ	3.09 (2.20)	3.34 (2.20)	2.23 (1.73)	8.66
第 7 因子	怠慢と気短	3.06 (2.06)	4.02 (2.26)	2.32 (1.87)	9.40
第 8 因子	自己顕示性	1.62 (1.38)	1.90 (1.63)	1.40 (1.37)	4.92
第 9 因子	勝ち気	2.02 (1.59)	2.12 (1.56)	1.53 (1.29)	5.67
第10因子	もろさ	2.05 (1.45)	2.44 (1.61)	1.44 (1.30)	5.93
第11因子	おおらかさ	1.45 (1.42)	1.79 (1.40)	1.23 (1.20)	4.47

さしさの因子」などは、2つの場面間の変動性が小さい。すなわち、おおらかさ、自己顕示性、もろさ、勝ち気、やさしさといった面は、友人・異性場面間であまり変動せず、同一個人のなかでは比較的安定した面であることがわかる。

3場面を通しての変動性ということでみていくと、変動性がとくに大きいのが「怠慢と気短の因子」と「内気とぎこちなさの因子」の2つで、「強情さの因子」と「積極性の因子」の変動性も大きい。3つの場面を通してとくに変動性が小さいのは「おおらかさの因子」と「自己顕示性の因子」で、「勝ち気の因子」と「もろさの因子」でも変動性は小さい。すなわち、怠慢と気短、内気とぎこちなさといった面は同一個人であっても場面によって非常に異なった現れを示す面であり、強情さ、積極性といった面も同一個人においても場面により変化しやすい面であることがわかる。反対に、おおらかさ、自己顕示性といった面は個人のなかで非常に安定性のある面であり、場面が異なっても似た現れを示すこと、勝ち気、もろさといった面も個人のなかの安定性が高く場面が異なってもほぼ似た現れを示すことがわかる。

自己の姿は場面に規定されるところが大であるというのが本研究の前提であった。本研究により、場面によって個人の自己概念は異なること、また各場面が個人に対して一定の性格特性の現れを要求するものであることが示された。ただし、今回の結果はあくまでも具体的に選定された3つの場面間の変動性の検討から得られたものであるという限界があるのは言うまでもないことである。これらの場面が日常生活を代表する場面であるとはいっても、重要な場面は他にもいろいろあり、別の場面を選べばまた異なった傾向となる可能性があり、本研究の結果を現時点で一般化することは意図していない。むしろ、自己のさまざまな面の場面間変動性に関するより一般的な法則性をとらえるために、さらにいくつかの代表的な場面を設定し検討することが必要であろう。

以上は、場面に焦点づけたときに得られた知見であるが、個人に焦点づけたときには、同一個人であっても場面により異なった現れを示しやすい面がある一方で、同一個人のなかではかなり一貫してみられ場面が異なっても似たような現れを示しやすい面があることが明らかとなったと言えるであろう。

筆者の関心は、個々の対人場面がどのような性格特性の現れを要求するかということよりも、個人の性格特性が対人場面によってどのように変動するかにある。そして、その変動の仕方に個人差があり、その変動のパターンが一般に性格と呼ばれるものなのではないかと考える。さらには、そうした自己の性格の認知が自己概念の一端を表すものであるなら、自己概念をとらえるにも対人場面と結びつけてとらえる必要があると言えるであろう。こうしてみると、個人の自己概念を問う際には、その都度目的に応じてとくに取りあげたい場面に絞るか、いくつかの典型的な場면을提示して問うという方法をとるか、あるいは場面間変動そのものを含むようなかたちで問うといった工夫が必要であることが確認された。

注

本論文は、榎本(1993)において簡単に報告した調査の詳細な分析結果をまとめたものである。データが散逸しており分析のし直しができないので、古い分析手法によるものをそのまま掲載してある。

文献

- Bruner, J. 1994 The “remembered” self. In U. Neisser & R. Fivush(Eds.) *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*. New York: Cambridge University Press, 41 - 54.
- Byrne, B. M. & Shavelson, R. J. 1996 On the structure of social self-concept for pre-, early, and late adolescents: A test of the Shavelson, Hubner, and Stanton(1976) model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 599 - 613.
- Campbell, J. D. & Fehr, B. 1990 Self-esteem and perceptions of conveyed impressions: Is negative affectivity associated with greater realism? *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 122 - 133.
- 榎本博明 1987 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58, 91 - 97.
- 榎本博明 1993 自己概念の場面依存性に関する研究 日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 230 - 231.
- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 榎本博明 1998 「自己」の心理学 自分探しへの誘い サイエンス社
- 榎本博明 1999 私 の心理学的探求 物語としての自己の視点から 有斐閣
- James, W. 1892 Psychology, briefer course(今田寛 訳) 1992 心理学(上・下) 岩波書店)
- Kihlstrom, J. F. & Cantor, N. 1984 Mental representations of the self. *Advances in Experimental Social Psychology*, 17, 1 - 47.

北村晴朗 1977 新版 自我の心理 誠信書房

Mischel, W. 1968 Personality and assessment. John Wiley & Sons. 詫摩武俊監訳 1992 パーソナリティの理論 状況主義的アプローチ 誠信書房

Neimeyer, G. J. & Raeshide, M. B. 1991 Personal memories and personal identity: The impact of ego identity development on autobiographical memory recall. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 562 - 569.

Shavelson, R. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. 1976 Self-concept: Validation of construct interpretations. *Review of Educational Research*, 46, 407 - 441.

Song, I. S. & Hattie, J. 1984 Home environment, self-concept, and academic achievement: A causal modeling approach. *Journal of Educational Psychology*, 76, 1269 - 1281.

鈴木孝夫 1973 ことばと文化 岩波書店

Tice, D. M. 1992 Self-concept change and self-presentation: The looking glass self is also a magnifying glass. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 435 - 451.

和辻哲郎 1934 人間の学としての倫理学 岩波書店

A study on the situation-related self-concept

Hiroaki ENOMOTO

In general, self-concept is measured by simple methods depending on the idea that each people has a single self-concept. But we actually think, feel, and act differently according to the various situations. The purpose of this study is to appeal the necessity to grasp the situation-related self-concept. The subjects were 94 male and 91 female university students.

It was found that people had not a single self-concept but multiple self-concept fitting to each situation, I named the situation-related self-concept. To put it concretely, subjects showed different self-concept whether they were in front of their family, the best friend, or the opposite sex person they liked most. The self-concepts of the same subject varied according to the situations, and the three situations drew a characteristic face of the self-concept respectively. It was suggested that each situation demanded peculiar personality characteristics, so when we tried to grasp the self-concept of any person, we have to assess it combined with some concrete situations. The merit of assessing the situation-related self-concept was discussed.

Key words : self-concept, multiple self-concept, situation-related self-concept